

## 二度目の老後（わが日記）

池田 隆

日記を毎日つけ始めたのは、六十歳定年で会社から大学へ移って二年目の新年（西暦 2000 年）からである。「マイブック」という一年分の日付のみが記載された新潮文庫を用いてきた。現在はその二十七冊目を使っている。ただ過年度の日記は時たま頁をめくることが有ったが、しっかり読み返すことはなかった。このまま無為に私と共に棺桶行きかと思うと不憫に思えてきた。せめて書いた本人ぐらいは最初から丁寧に読み返して上げようという気になる。

Excel 表に年月日と文中に出てくる場所、人名、事柄名をメモしながら、約二時間で一月分をこなすペースで進めていく。

忘却の彼方に消えていた人達の名前と顔や訪問先の光景が頭に浮かぶ。時事批評や日常における喜怒哀楽の記載も生々しい。現在の立場で過去を振り返りながら書く自分史とは違い、日記はドキュメンタリーや私小説に近い。一市井人の平凡なストーリーでも、結末を知って読む点では歴史物や伝記物に似ているかも知れない。

現在読んでいる箇所は未だ技術者倫理の指導や超小型タービンの研究に明け暮れていた大学勤務の日々である。この後には徒歩巡礼、ルーツ探し、妻の子育て支援活動、外国技術者指導、孫の保育園迎え、被爆証言の地球一周船旅、自身の心臓病、原発事故、妻の癌、企業 or ペンクラブでのエッセイ執筆、都心高層マンション暮らし、奥の細道歩き旅、山荘生活、農作業、要介護の妻に代る主夫業と続く。ただ昨今は書く事柄も減り、三食に何を作り、旨かったとか不味かったという記載が主体になっている。

往時の日記を読み返し始めると、よくこれほど慌しく動き回れたなと我ながら驚く。今日からの日記には往時の行動や思考に対する現時点での思いも書き加えてみようかな。今は怠惰と諦観、忘却に苛まれているが、少しは自身を鼓舞できるかも知れぬ。

この日記を読みきるには最短でも今年一杯は掛る。只それは私にとって四半世紀に及ぶ二度目の繰返し老後体験となることだろう。